



発行所 アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編集 アシュラム誌編集委員会

振替 01050-6-53772
アシュラムセンター

印刷 明文舎印刷商事(株)

解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

今月のみ言葉、「何が、キリストの愛から私たちを引き離すことができるのでしょうか」(ロマ8:35)には、次のような言葉が続く。

「艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か」と。そして、最後には、「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」と、パウロは高々に宣言するのだ。

キリストの愛、すなわち「御子をさえ惜しまず死に渡される」御父の愛は、私たちの被るどんな苦しみや悲しみにも耐えることのできるほど偉大なものなのである。多くのクリスチャンは、この主イエスの十字架の、み苦しみに、私たちの罪の贖いを、何度も何度も聞いてきたことであろう。

さて、今年、榎本保郎牧師の新たな本が、いのちのことは社より出版される。実は昨年

の召天45周年を記念しての出版をと考えていたのだが、コロナ等の影響で、残念ながら1年延びてしまった。長く埋もれてしまっていた、未完の原稿『この人を見よ』というイエス伝である。それはいのちのことは社創立25周年企画と題し、『百万人の福音』誌にその死の直前まで連載されていたもので、約2年間で25回分の原稿が残されている。

瞑想

何が、キリストの愛から私たちを引き離すことができるのでしょうか。

保郎牧師にとっては、今治教会を辞任し、新たにアシュラム運動に専念する大きな決断をしたのちに書いた、渾身の「イエス伝」である。確かに本人もその中で書いているように、「キリスト伝などというものは、簡単に書けるものではない」。しかし、どんな高名な神学研究よりも、個人の強烈な信仰体験の中にこそ、語るべき「イエス伝」があるのではないかと、

それを読んだ私は思う。この中に、次のような逸話が記されていた。

「ある時、一人の盲人が、わたしにこんなことを質問したことがある。『二千年も前、頼みもしないのに、勝手に十字架についておいて、あれはお前の罪のためのものであったと言われなくてもありがた迷惑です』」

なんと鋭い言葉であろう。ふつうはここまで追い詰めない

主幹牧師 榎本 恵

□マ8:35(下)

「頼んだから十字架についてくれたというのなら当然じゃないですか。頼まんに十字架について死んでくれたところに神の愛があるんですよ」わたしはとつさにこう答えた。すると彼は大きな声で、「わかりました」と言った。

そこに出席していた人たちは、この禅問答のようなやりとりを聞いてどつと笑った。あるいはこの笑いの中には、みんなが持っている信仰のモヤモヤが晴れた喜びが含まれていたのかもしれない。あとでよく考えてみると、なんだかよくわからない回答のようにも思えたが、このことから彼は熱心に求道し、やがて信仰を告白して信徒となり、いまでもよき信仰生活を送ってくれている。「この人を見よ」より。――

友よ、私たちをキリストの愛から引き離すものは何か。それは、私たちの外で、誘惑してくるものではなく、私たちのうちにあるこのモヤモヤに他ならない。この霧を晴らしてくるもの、それこそが「弱い私たちを助けてくださる『霊』」(ロマ8:26)なのだ。「わかりました」と叫ぶ者となろうよ。

第48回年頭アシラムお礼状

榎本 恵

あなたこそエル・ロイ
(わたしを顧みられる
神)です。

創世記16・13

イエスは主なり。
2023年、第48回
年頭アシラムにご参
加、またお祈りくださ
り感謝いたします。

今日まで、参加者の
どなたからも、コロナ
に感染したという話は
聞いておりませんの
で、一安心しております
。今回のコロナは、



北海道から九州までのリアル参加。
またZoom参加者もあり感謝！

感染力が強く、私だけ
は大丈夫ということは何
もないようです。
どうかくれぐれもお
大事になさってください
。

さて、新しい年も、
ひと月余りが過ぎよう
としていきます。皆様の
祈りの生活は、今日も
点を打つように続けら
れていきますでしょう
か。毎日、その友を覚
え、取り成しの祈りを

することは、大切なこ
とです。それは何より
も、自分が祈られてい
ることに気づく大事な
ときだからです。自分
が祈っているからこ
そ、自分も祈られてい
るのだということが身
に染みて感じるものが
できるのです。これは
「祈っているよ」とい
う言葉は、クリスチャ
ンのあいさつの言葉か
ら思っていた不遜な私
自身の体験でした。ど
うか皆様の祈りの生活
が守られ、続けられま
すように。
皆様を覚え、祈って
おります。
また、アシラムセ
ンターのために、また
私のためにもお祈りく
ださい。
(アシラムセンター
主幹牧師)

京浜アシラムの 新しい歩み出し

加々美 要

「主イエスの道は真
理であり喜びの人生で
ある」(ヨハネの福音
書14章6節)

第47回京浜アシラ

ムは、主奉仕の岩波久

一牧師がヨハネの福音

書14章6節を主題聖句

としてご奉仕ください

ました。岩波久一師は

第1回目の京浜アシラ

ムから参加なされ、

榎本保郎師から「朝の
15分があなたを変え
る」のことはを実行し
ておられます。

今回は台湾から4名

の参加者を迎え、幸い

な交わりと静聴、分か

ち合いの時を持たせて

いただきました。二日

目の夜は、自己紹介と

アシラムとの関わり、

参加の恵みなど語

り合いました。

その際、京浜アシラ
ムの今後について話
し合いの時を持ちまし
た。

今後の新しい体制と
して、実行委員長を岩
波久一師が、事務局を
加藤かおり師が担当す
ることになりました。

新しい歩み出しが守ら
れ祝されるように祈り
ました。

これから1年間、各
ファミリーでメンバ
ーの課題を祈ります。ア
シラムは集会が終わ
ると共に新しいスタ
ートが始まります。



まだ収束しないコロナ禍のアシラムが守られ祝されたことを感謝しています。

全国のアシラムの友のお祈りに感謝いたします。

京浜アシラムの真

の主催者は今回も「イエス様ご自身」でした。栄光を主に帰して！

(京浜アシラム 前事務局)
(単立桶川聖書教会)

台湾アシラムの感想

村上 良太郎

村上良太郎と申します。今年26歳で、3年前に滋賀に引っ越してきた時に、知り合いからの紹介を受けてアシラムにつながりました。

普段はアシラムの夕礼拝に参加するだけで、今まで大きなイベントには参加したことはありませんでした。

2023年1月の下旬にアシラムの先輩から台湾でのアシラムについて紹介していただき、興味を持ちま

いただきました。そして、その部分の様子を描いた一枚の絵を見て静まって自由になんか思いついたこと、

「自分が弟子なら何というだろうか？」

「なぜこんな嵐の中に連れてきたのだろうか？」

国語の問題のように、答えを文章から探すような聖書の読み方だけに慣れていた自分にとって、自由に黙想だけをするという時間は久しぶりでした。

思い返せば肝心の信仰も、キリスト教や聖書の勉強がまず先で、静まって主の声を聞こうとする姿勢は少なかつたように思います。

例えば、感じることが主への信頼を疑うような内容であつても「主が祈りの中でいつか答えて



王牧師、皆様に「アンナとシメオン」誌を。ご来訪、お待ちしております。

改めて気づいたことがあります。

主は決して、言葉を選んで話さねばならない、恐ろしい存在ではなく、主を疑い恐れる私たちを愛して下さるのです。

そのことに気づかせてくれた台湾アシラムにも感謝です。

(村上兄の通訳により恵師、光太兄随分と助けられた)



滞在中、台湾の友の温かいおもてなしに多謝。盧兄、恵師、李姉、光太兄、村上兄。



信對行來得完全

皆様に祈っていただいている母、榎本和子の近況等をご報告いたします。

母は昨年十月三十日に97歳を迎えました。それまで早天祈禱会、常任運営委員会、夕礼拝にも参加させていただいていましたが、そのころから心身の弱りが顕著になり床に臥せる日が増えました。

気持ちの浮き沈みもあり、神さまに「どうか母と共にいて励まし、平安をお与えください。」と祈る毎日でした。

特に十二月を前に私が家を空けることができずに困り果てていた時、母が急に高熱を出し緊急入院することになりました。一か月の入院で心身とも少しずつ快方に向かい、以前の穏やかさを取り戻すことができました。また、私に与えられた仕事もすべて行うことができ、神さまの完璧なご配慮にただただ畏れと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今年に入って、一度はヴォーリス記念病院のホスピスに体験入院しましたが、また退院し現在自宅で介護生活を送っております。私自身、母の入院の日、追突事故にあったり、その後大雪のため、大阪からの帰りの電車に閉じ込められ自宅に着くまで十六時間もかかりどうなることかと思いましたが、母は入院していて心配なく、私はなぜか怪我もなく気持ちも落ち着いていることができました。

この落ち着きはどこから来たかと申しますと、私の今年のみ言葉によってでした。私は毎年一年の最初に今年のみ言葉を決めます。今年与えられたみ言葉は、

「うろたえてはならない。おののいてはならない。

あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」ヨシュア記1章9節

この言葉にどれほど励まされたことでしょうか。これからも色々大変なことがあるでしょう。しかしこのみ言葉を忘れず、主に信頼して歩いていきたいと願っています。皆様のお祈りに感謝しつつ。

橋本るつ子



シメオン黙想の家、掃除ご奉仕の後で、和子母と楽しいひととき。写真左より市橋姉、モッド姉、築山姉、るつこ姉、和子母。



和子母のお気に入り写真。特に後宮師の笑顔が目に焼きついていると。16年ほど前の写真。琵琶湖畔にて。



2022年センター聖書教室にて、和子母に寄り添うるつこ姉。

まは生きておられまし

榎本和子



2日目早天祈禱会ご奉仕 石垣弘毅師(中標津教会)



2日目早天祈禱会ご奉仕 樋口洋一師(島原教会)美しい朝焼けと共に。



2日目奨励 齋藤篤師の時。(仙台宮城野教会)(アシュラムセンター常任運営委員)



年頭アシュラム早天。Zoom参加も。

誕生日カード感謝のメールより



主に在る早天祈禱のたくさんの兄弟から…お励ましのカードをありがとうございました！

主の憐れみの中に 84 才を迎えられてただただ感謝です。新しい一年も日々みことばを尋ね求めて歩めますように祈って参ります…。恵師の海外アシュラム宣教の祝福とご無事を祈っております。

和子お母様の上に主の豊かな顧みをお守りを共に祈りつつあります！ 安仲 萌子(静岡聖書教室)

主幹牧師の2022年度の振り返りと2023年ビジョン(2)

病押しブラジルまで行く
父の守り信ぜし子の心はや

小林佳子歌集であいの(三)より

また、アシュラム誌についても、発送費用の大幅な値上げに伴い、9月には、その継続か否かを問うハガキを作成し、930名分の個人、団体宛に送付したのですが、返信で帰ってきたのが、394通のみ。うち、継続が180、中止が214でした。もちろん、この中には、ホームページを通してこれからはアシュラム誌を見ると回答して下さった方も多いのですが、それ以上に全体の58パーセントに当たる方々からは、何のレスポンスもなかったことが、正直大変ショックだったのです。毎月のアシュラム誌に原稿を書き、集会案内を載せ、記事の編集しているものにとっては、このアシュラム誌がどれくらいの人に読んでいただいているかを知ることが、喜びであり励みです。ところが、半数以上の方から、返信がいただけなかったのは、予想していたとはいえ、残念でならないのです。

しかし、たとえどんなに「多くの人の愛が冷え」(マタイ24:12) たとしても、私たちは、淡々とその果たすべき役割、それは、パウロがコリントの信徒に向けて語ったように「榮譽を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにも」(Ⅱコリント6:8)、真理の言葉を語り、神の言葉に聴き従うものでありたいのです。

冒頭に掲げた、平野克己牧師の言葉は、一昨年12月の、初めて開催されたリトリートアシュラムでの講演のレジメからの引用です。「神の言葉を野に放て」と題された講演は大変示唆に富むものでした。師は、今の教会があまりにも個人の救いや慰めに偏りすぎて、「支配と権威、暗闇の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にする」すなわち悪との戦いを放棄してのように思うと

語り、「あえて冒険をして説教をしよう」と、勧められたのです。「神が結果に責任を持ってくださるのです。私たちはみ言葉を宣言するだけで十分なのです。そうすることによって、世が知ろうが知るまいが、私たち自身、気づこうが気づくまいが、私たちは世界を変えていると信じればよいのです。ただ立ち上がって、語るべく与えられた言葉を語ればよいのです。愛と挑戦の言葉を、声に出して言うにも震えることのある、恐ろしく明白な真理の言葉を語りさえすればよいのです」。

今、日本社会も、世界も大きな曲がり角へときています。主の平和を語るのに困難を感じる、そんな時代の中にあるのです。しかしなお、私たちは、「武力によらず、権力によらず、ただわが霊によって」(ゼカリヤ4:6)と主の言葉を語り続ける者になりたいのです。悪魔の策略との戦いとは、血肉の戦いではなく、私自身の中にある絶望や諦めとの戦いなのです。「恐ろしく明白な真理の言葉」を語る者となる、この単純さこそが私たちアシュラム運動の、時代に対する今日的存在意義なのです。

(続く)



第1回リトリートアシュラム。4日目昼食ガーデンパーティ。中央に講師の平野克己師。右隣はガーデナー師。

あ と が き

今、ニューヨークのホテルに着いて、この編集後記を書いている。2月11日からの第40回台湾愛修会に出席し、そのまま家に帰ることなく、羽田からニューヨークへ、そして明日はサンパウロへ向かう。時差ボケが少々あるが、3年ぶりの海外でのアシュラムに興奮しているのか、今のところ健康も守られ、順調に旅を続けている。

「更に、わたしたちがあなたにたにぜひ会いたいと望んでいるように、あなたもわたしに会いたがっていきりに会いたがっていきることを知らせてくれました」(1テサ3:6)。

パウロは、テサロニケの教会の様子をテモテから聞き、こんな熱い想いをしたためている。

お互いが共に顔と顔を合わせ、信仰の交わりを持つこと、この3年間のパンデミックの困難を思う時、このパウロの気持ちがよくわかる。

どうか私たちも、遠くにいる信仰の友との出会いを、一期一会のものとして大事にしていこう。(恵)

中止、又はオンラインに変更もあり。
ホームページ、電話等でご確認下さい。
直前の変更の場合あり!

3月の聖書教室など		【主な問い合わせ先】 0748-33-4030 アシュラムセンター
7(火)	Zoom聖書教室 (AM10:30、PM7:30)	
11(土)	聖書と学ぶ会 (Zoom PM8:00)	
17(金)	センター聖書教室 (アシュラムセンター AM11:00)	
19(日)	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝 (PM5:00)	
21(火)	大阪聖書教室 (大阪クリスチャンセンター AM10:30)	
22(水)	美しい足の会 (Zoom AM10:30、PM7:30)	
27(月)	静岡聖書教室 (旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30)	
28(火)	東京聖書教室 (御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30)	
28(火)	しみじみする会 (桜美林大学荊冠堂チャペル PM2:30)	

3月のアシュラムなど		
4(土)	ブラジルアシュラム 奉仕者 榎本 恵師	0748-33-4030 アシュラムセンター
16(木) 18(土)	2023年 修道場アシュラム① アンナ祈りの家、シメオン黙想の家	0748-33-4030 アシュラムセンター

4月のアシュラム予定		
20(木) 22(土)	2023年 修道場アシュラム② アンナ祈りの家、シメオン黙想の家	0748-33-4030 アシュラムセンター
28(金)	第25回 阪神一日アシュラム 日本キリスト教団 神戸聖愛教会 奉仕者 榎本 恵師 主題聖句 「キリストが死に、そして生きたのは？」 アシュラムセンター □マ14:9	0748-33-4030 アシュラムセンター
※変更になりました ご参加お待ちしております。 詳しいご案内、申し込み用紙は4月号に!		

5月以降のアシュラム予定	
5月18(木)~20(土)	2023年 修道場アシュラム③
6月17(土)	新潟一日アシュラム
6月19(月)~21(水)	第47回 教職アシュラム
6月22(水)~24(金)	2023年 修道場アシュラム④
7月20(木)~22(土)	2023年 修道場アシュラム⑤
9月28(木)~29(金)	第11回 日光オリブの里アシュラム
10月30(月)~1(水)	第18回 国際正義・平和アシュラム in 新潟

森戸啓子姉が2月16日天に召されました
長い間、病と共に関東青年アシュラムのため祈り、お働きくださいました。感謝いたします。祈りが継がれますように。



←樋口隆利、栄子ご夫妻。祈りが聴かれ、2月にアシュラムセンター近くに福岡より移住。愛犬2匹も。早天祈祷会の友に。長年、福岡アシュラム、聖書教室を支え続けくださった。

みことば

ノースカロライナ大学院生
Zoom聖書と学ぶ会
榎本 空

あなたがたも、私の戒めを守るなら、
私の愛にとどまっていることになる

ヨハネ15章10節

ここ数週間は子育てに追われていた。離島の伊江島に産婦人科はない。だから臨月を迎えた百々子は、軽い陣痛がきたある夜中、救急船で向こう岸に運ばれていった。それから陣痛は治まり、出産まで百々子は産婦人科で待機となる。島には私と、幼い二人の姉妹が残された。

島での生活は、なかなか過酷なものだった。お風呂も、お着替えも、歯磨きも全てを拒否する次女は、絵に描いたようなイヤイヤ期を迎え、布団の上では長女がお母さんに会いたいとメソメソしている。

一人が歩いて公園に行きたいと言えば、もう一人は車で行きたいと言うし、一人がお茶を飲みたいとせがむ向こうでは、もう一人がハサミはどこだと叫んでいる。こちらにも余裕がある時ならいいが、そんな瞬間は稀で、大抵は機嫌悪く、ぞんざいに接してしまう。そうなるとう戒めと愛の境界線は、全く曖昧になる。

歯磨きしないと虫歯になると脅すのは、子どもの将来を思ってか、それとも力づくでその場を収めようという私の傲慢か。まったくイエスの姿からは程遠い私がいる。

祖母という二人の救世主が現れて、なんとか一息つく。



←おじい(阿波根昌鴻氏)と筆者。おじいさんの真似をして、棒の杖をついて歩いていました。